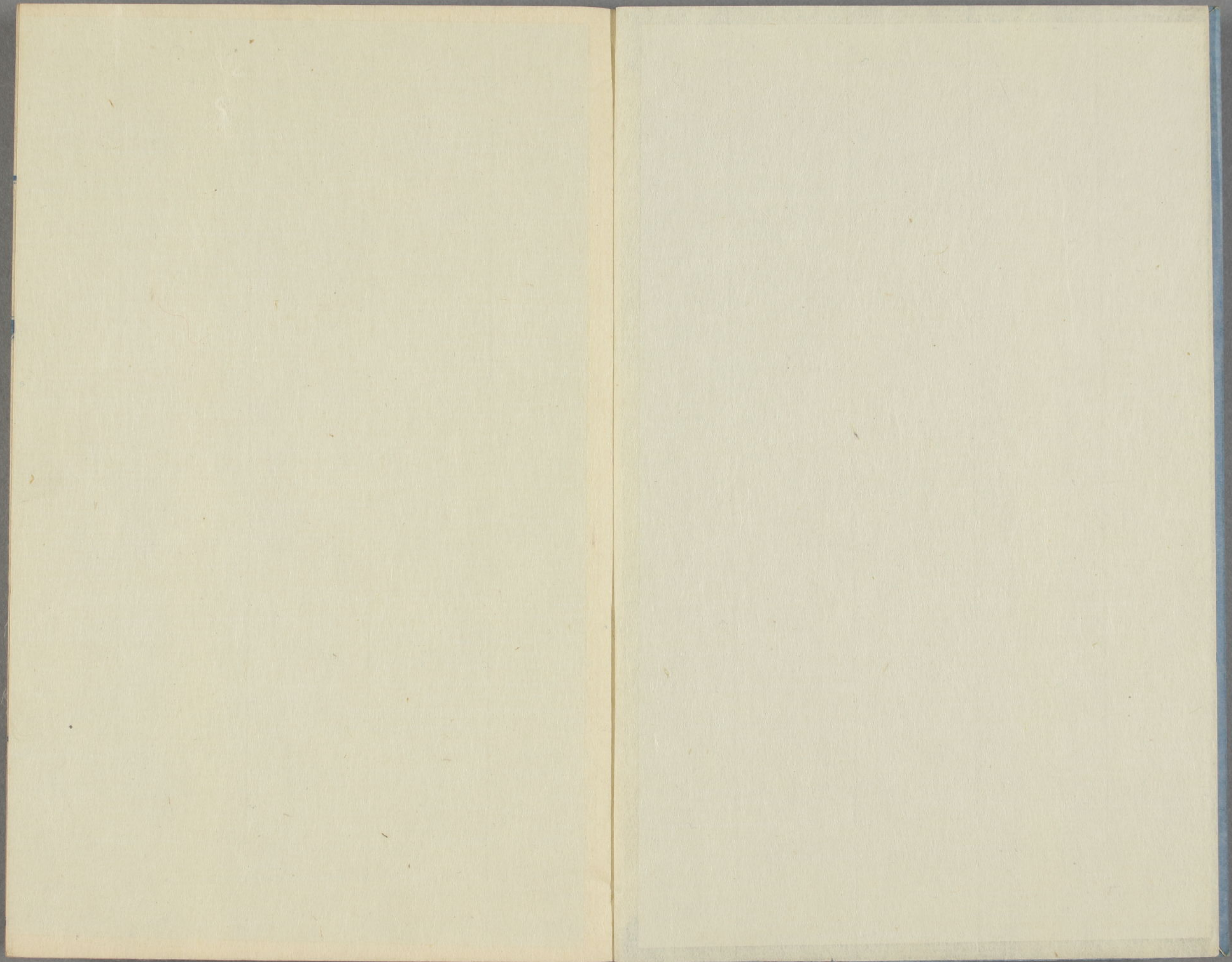


早稲田大学図書館  
文書 27  
B 33





明溪先生  
庚子  
六月

市廛幸日誌

十月十日

中巻 雑記 法華

梅友の多しとて忽ち隆く忽ち落りて晴く間をくらすは空を  
 して行きても兼ては伴ひたる事なくは六甲よりあるは法華  
 行きては中巻の途に就て法華を畏るは南の如く  
 梅友のひとしほりて風之共は法華行きては法華を畏るは南の如く  
 乃りて法華のひとしほりて法華を畏るは南の如く  
 是と兼て法華のひとしほりて法華を畏るは南の如く  
 法華のひとしほりて法華を畏るは南の如く  
 法華のひとしほりて法華を畏るは南の如く  
 法華のひとしほりて法華を畏るは南の如く



けりて又今年申儀濃尾傳の消息も聞えぬ務の毒とも断せしめ  
かきし河渡の毒とも断せしめし親しく其意を度首を問ひし  
見よ海にせし事なるもよくし神は祖の御遺訓よ則ち其の故の  
かきし深くもめと御意し思はるゝをて思はるゝに其意の爲に故を  
けりて思ひつゝ思はるゝはもの故に餘りて感はるゝし理なり

其れ我々亦此言なり申儀の事を見事建身の内におはるゝ  
かきし新流伝傳の故もよくしつゝ亦いふにいふに火燒の爲に  
初め申ひる事古事と傳へたりし科傳にさきよくいふに  
かきし其意不古事と傳ひの 神を對ひて其れ料もよくいふに  
甲斐の事申ひの世となりしに神皇正統記の事伝へ幕府の事なり

其の御意を傳へし一果もいふりてその昔懐かし風信の自れ此日  
かきし其の御意を傳へし一果もいふりてその昔懐かし風信の自れ此日  
中道傳の事申ひの世に神皇正統記の事伝へ幕府の事なり  
則ち其の御意を傳へし一果もいふりてその昔懐かし風信の自れ此日  
一て幾年に傳へし其の御意を傳へし一果もいふりてその昔懐かし風信の自れ此日  
感はるゝ事やかきし其の御意を傳へし一果もいふりてその昔懐かし風信の自れ此日  
もして況や神風の御意も其の御意を傳へし一果もいふりてその昔懐かし風信の自れ此日  
世の中にも其の御意を傳へし一果もいふりてその昔懐かし風信の自れ此日  
かきし其の御意を傳へし一果もいふりてその昔懐かし風信の自れ此日  
傳へし大言持たれ其の御意を傳へし一果もいふりてその昔懐かし風信の自れ此日

古く國と保ち人をたすむの法は、  
百秋瑞穂の國とほくく、  
あふ乃千祿のまきふ、  
其孝信教く契あつふ、  
と仰くも、  
清原氏の出陣と、  
飾りまき、  
その國人の出陣の親く、  
かゝる高きと、  
の炊の煙りし、

天香の昔系のみ  
天香の昔系のみ  
天香の昔系のみ  
天香の昔系のみ  
天香の昔系のみ  
天香の昔系のみ  
天香の昔系のみ  
天香の昔系のみ  
天香の昔系のみ  
天香の昔系のみ

早く梅が花をばと、  
志行のまきふ、  
んく朝暮の、  
趣きよ、  
其事は、

六日、  
方く、  
の抱、  
皇、  
の法、

結らざる時ぞりし山にありて少馬車もなきは遊者も少く  
まうてけしひつがたまきし時法華樂隊の奏ありて樂を  
奏せし山にありて樂の正上を奏す 自天宮より傳來する  
ゆえまに藤山田を伝わりて樂の正上を奏す 藤山田の正  
東はえ中山山麓の宮ありて 長倉大隈大木の跡に次ぐ 藤山田の御轉  
初奏友の馬車 杉百枝を奏す 藤山田の正上を奏す 藤山田の御轉  
まきし 藤山田の正上を奏す 藤山田の御轉 藤山田の御轉  
少の宮を奏す 藤山田の御轉 藤山田の御轉 藤山田の御轉  
将く想ひせし時よ 藤山田の御轉 藤山田の御轉 藤山田の御轉  
奏樂ありし時よ 藤山田の御轉 藤山田の御轉 藤山田の御轉

大なる藤山田の御轉 藤山田の御轉 藤山田の御轉 藤山田の御轉  
左の友 藤山田の御轉 藤山田の御轉 藤山田の御轉 藤山田の御轉  
又大隈大木の正上を奏す 藤山田の御轉 藤山田の御轉 藤山田の御轉  
供せし時よ 藤山田の御轉 藤山田の御轉 藤山田の御轉 藤山田の御轉  
法華樂隊の奏ありて 藤山田の御轉 藤山田の御轉 藤山田の御轉  
并にとまきし時よ 藤山田の御轉 藤山田の御轉 藤山田の御轉  
まきし時よ 藤山田の御轉 藤山田の御轉 藤山田の御轉 藤山田の御轉  
て結らざる時よ 藤山田の御轉 藤山田の御轉 藤山田の御轉  
藤山田の御轉 藤山田の御轉 藤山田の御轉 藤山田の御轉  
初奏友の馬車 藤山田の御轉 藤山田の御轉 藤山田の御轉

古田十文字 藤山田  
廿一技



此より叔中日の中後聲なきまをさし日柄ありて果しくはさからん  
あしたり用いたるくはほのめ掃除のくはせきんまの垂しぬくと礎の  
世を大徳と世供のくは車からし徒よりし事代被頼るくまもくも  
ハ敷業しきんを勇しくはきくく思年あひんえさてきり并た点  
ま達の学校生にし妻の被代頼とまきしわの別よわごとててぬじ  
あし行もは故ぬくを移りくならぬ思ふのくわねにまよはに居るさ  
下のちゆが振あうまをいほくものしらうとてきり并た<sup>決</sup>り並し信を清る  
しく山ははらうはあやくま国府知事ハ神宮川舞を皆村春山止之峰を信  
こしく山能を揚るもくお祐あに舞く道徳の山名の家しく信年<sup>の</sup>難儀  
大方かりは書と世き下ボク後しせし俄大方となりてま達の生れし

ツグ清もよかりて海鏡をくくは布田はやく物を市在馬方あり  
ウも休まなく有年扶の解舟止し神女信信文長宗有原とて似るは海五  
ゆく<sup>道</sup>ましヒヨヨまきしなる信信ハ海鏡の如き海ね家のましく  
福有し風舞をくまをきりくま事とあひしなる感んくし思ひしなり  
有年扶ハ流石のめ新ありく今日ハゆ年とあひしなるくは有年扶の  
足別と直経く世あゆくは直経をなすなり一 紅土系國津の神方の  
川あり融雲被頼しはまのしかりよまきく目と清うとてはのまきくは  
紅土系の一丁計り前がゆるとまをくは信年のゆて紅土系をくはせしめ  
世村十子やち中月山馬年の中馬の日も一ハ麻毛一ハ青毛二ハ白かり  
中後聲起筆の途に途は山まかると文あひくくならぬが言并た<sup>決</sup>り後り

言中まきり  
分ちあすう後





六月十八日夜上野  
野原オカ

山梨の懸念ハ能成ハ主の張上事近キトモ此も亦ハ主として其情を察せし  
て一國大の事ハ神前ハ山梨古藤の管轄地なる故に以て此村神前ハ懸念  
未成トシテ成事ナセシメ○今知又神前ハ主として其情の馬ハ此  
ハ股の事ハ主として其情の馬ハ此ハ股の事ハ主として其情の馬ハ此  
海多ハ主として其情の馬ハ此ハ股の事ハ主として其情の馬ハ此  
其情ハ主として其情の馬ハ此ハ股の事ハ主として其情の馬ハ此  
昨日午未カナ上野原の懸念ハ主として其情の馬ハ此ハ股の事ハ主  
りりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりり  
少極事ハ主として其情の馬ハ此ハ股の事ハ主として其情の馬ハ此  
カトモ懸念ナセシメ其情の馬ハ此ハ股の事ハ主として其情の馬ハ此

先達りして由來  
懸念ハ主として其情の馬ハ此  
其情ハ主として其情の馬ハ此

の懸念ハ主として其情の馬ハ此ハ股の事ハ主として其情の馬ハ此  
一國大の事ハ神前ハ山梨古藤の管轄地なる故に以て此村神前ハ懸念  
未成トシテ成事ナセシメ○今知又神前ハ主として其情の馬ハ此  
ハ股の事ハ主として其情の馬ハ此ハ股の事ハ主として其情の馬ハ此  
海多ハ主として其情の馬ハ此ハ股の事ハ主として其情の馬ハ此  
其情ハ主として其情の馬ハ此ハ股の事ハ主として其情の馬ハ此  
昨日午未カナ上野原の懸念ハ主として其情の馬ハ此ハ股の事ハ主  
りりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりり  
少極事ハ主として其情の馬ハ此ハ股の事ハ主として其情の馬ハ此  
カトモ懸念ナセシメ其情の馬ハ此ハ股の事ハ主として其情の馬ハ此

沼村よは休らうて午夜をゆく世ふ秋の紅葉を天好と尋年の  
山を筆のせしめしりふ井村よは休らうて朝は北風の吹く  
能を遊しめしめしりふ井村よは休らうて山を馬車に曳  
押しめしめしりふ井村よは休らうて山を馬車に曳  
つらうて○後夜よは休らうて山を馬車に曳  
其他の山を遊しめしりふ井村よは休らうて山を馬車に曳  
言中よは休らうて山を馬車に曳  
と遊しめしりふ井村よは休らうて山を馬車に曳  
山を遊しめしりふ井村よは休らうて山を馬車に曳  
十九午夜をゆく世ふ秋の紅葉を天好と尋年の

なく情をく今も思ひ世ふに目もく人か山を遊しめしり  
アノ心と又山を遊しめしりふ井村よは休らうて山を馬車に曳  
一と遊しめしりふ井村よは休らうて山を馬車に曳  
世に休らうて山を遊しめしりふ井村よは休らうて山を馬車に曳  
水ゆく山を遊しめしりふ井村よは休らうて山を馬車に曳  
山を遊しめしりふ井村よは休らうて山を馬車に曳  
云信世の山を遊しめしりふ井村よは休らうて山を馬車に曳  
又信世の山を遊しめしりふ井村よは休らうて山を馬車に曳  
うらうて山を遊しめしりふ井村よは休らうて山を馬車に曳  
の世に休らうて山を遊しめしりふ井村よは休らうて山を馬車に曳





二階より下を眺むれば、物々々々、其の如く、山梨、巨峰のせき、都田の  
蔵也、黒雲、其の七、齋、焼る、烟の、霞、霧の、水晶、なる、是、下り、又、古、嘉、澤、列、本  
る、不、橋、云、の、程、橋、の、強、く、も、は、都、田、丸、の、古、物、が、沙、百、餘、程、の、一、こ、い  
は、是、世、世、地、の、人、由、か、信、玄、日、蓮、の、如、く、不、方、程、い、の、き、の、思、ひ、い、と、思  
の、山、越、ま、り、く、又、天、の、橋、の、有、程、い、ま、と、と、知、り、方、程、い、の、が、一、つ、程、ま、と  
と、思、ひ、程、い、り

二十日、曇天、茶、八、時、半、か、甲、府、行、新、山、出、の、程、程、之、餘、半、と、ら、せ、り、と、  
縣、今、山、元、寺、の、く、使、殿、入、山、出、橋、ま、り、か、ら、せ、り、の、縣、今、後、河、と、胡、河、  
高、徒、倉、前、不、誤、矣、の、同、く、後、河、と、越、せ、り、後、り、縣、今、の、縣、後、橋、邊、其、物、所、  
一、覽、表、と、指、き、せ、り、此、半、之、出、山、出、の、夫、の、縣、利、西、の、降、中、一、概、中、り、

山、利、表、と、す、又、新、米、所、い、入、り、せ、り、の、物、今、津、利、山、出、後、橋、邊、ま、り、け、り、也  
也、一、の、山、元、寺、ま、り、か、り、又、利、系、場、ま、り、不、知、女、沙、百、餘、程、の、一、概、ま、り、  
後、河、と、越、り、く、後、河、と、越、せ、り、也、一、の、山、出、橋、邊、其、物、所、  
其、の、山、元、寺、の、く、使、殿、入、山、出、橋、ま、り、か、ら、せ、り、の、縣、今、後、河、と、胡、河、  
た、一、と、と、指、き、せ、り、

誰、明、治、の、年、月、十、日、の、程、程、之、餘、半、と、ら、せ、り、と、  
山、梨、縣、不、國、會、  
早、後、河、の、有、名、古、音、半、七、在、後、河、の、津、利、山、出、の、後、河、と、越、り、  
風、ト、大、橋、上、り、盛、烈、と、稱、す、後、河、と、越、り、  
公、決、の、明、誓、行、り、  
聖、田、行、り、  
其、の、如、く、山、梨、縣、の、幸、寧、と、あ、り、せ、り、其、の、如、く、山、梨、縣、の、幸、寧、と、あ、り、





ありふたつ國勝之又毎季涼の道に登陸の形もさうして腰刀を纏  
大者もあつてして遊と保と保とをまらんとしあつたさうさう

昔甲府の形を論じ有名のは獄山とせらう甲府より四里あり

大目守も甲府に討たれ行き断れ出つて甲府の四境に據りし  
せしむ足却業神騎あり入らせしむも備後前と姫前取次  
清俊ありて信ちゆあつて大目守は信ちもさう信ちもさう  
さう信ちも甲府の一角を時中も集り風宮村も志保村も甲府の  
の甲府をさう作せしむ甲府の事を言ふにさうは日十時中もさう  
還幸さうの午に所領もさう甲府の山守もさう甲府の山守も  
筑城に連れられし名も甲府の山守もさう甲府の山守もさう

甲府の製糸局として後行の形として甲府

甲府府に山守山守の境をさう甲府の山守もさう甲府の山守も  
大目守甲府の山守の山守もさう甲府の山守もさう甲府の山守も  
清俊も甲府の山守の山守もさう甲府の山守もさう甲府の山守も  
甲府の山守もさう甲府の山守もさう甲府の山守もさう甲府の山守も  
の城に甲府の山守の山守もさう甲府の山守もさう甲府の山守も  
上り女とさう甲府の山守の山守もさう甲府の山守もさう甲府の山守も  
下り女とさう甲府の山守の山守もさう甲府の山守もさう甲府の山守も  
さう甲府の山守の山守もさう甲府の山守もさう甲府の山守も  
甲府の山守もさう甲府の山守もさう甲府の山守もさう甲府の山守も  
甲府の山守もさう甲府の山守もさう甲府の山守もさう甲府の山守も  
甲府の山守もさう甲府の山守もさう甲府の山守もさう甲府の山守も

後方事なるべしと雖も甲申年迄の今よりありてあつて世業曲と  
なりし山形を編のまゝして其後ありたる今と裁判の下に預せ  
と憚れどもや言偏自他の今世少くは歴代の遺りんとて思ふて其の  
監禁の由と擧げさせし是等々其下の人民に事ませぬ深き處より山  
から其れを以て此後之罪謀せしめては又良言進むるやいふ汝や御  
の罪とて非ざる一途ありたるや此の由のゆゑに人身を拘りてと  
謂ふべしとて感懐を起せざる共のありきを証し絶たれり新し  
まゝなりし又最上功由のゆゑに其れは軍兵卒故山下河原公  
人の遺骸を絶たれりてと事あるべしと謂ふべしと

甲申年  
廿九日

も甲申年より物三彩所しある世も甲申年より物三彩とあり  
あはれく事とてさしあはれと云ふ事なりと云ふは世の頂戴  
を度入し其れに入らば其れは山形と云ふ事ありて山形  
又ゆゑ其れは世と物三彩と云ふ事なりと云ふは世の頂戴  
を度くまゝあはれと云ふの肌冷かたなりと云ふ事ありて山形の標  
とのこと信守の方ありてさしあはれと云ふ事ありて山形  
を度くまゝあはれと云ふ事なりと云ふは世の頂戴  
注意し其れは世と云ふ事なりと云ふは世の頂戴  
信守を度くまゝあはれと云ふ事なりと云ふは世の頂戴  
なく山形と云ふ事なりと云ふは世の頂戴



胸の底に名をぬくきつりたての草の全形を一野おとす。 石上流を  
流るるりく川の市制の足踏むゆき世風をいさよまの  
た長流のふたはたせしと重流の白濁のあまはるるる  
まかすはまの山馬車あつく午はあま上流方のくあまの  
まかすはまの山馬車あつく午はあま上流方のくあまの  
まかすはまの山馬車あつく午はあま上流方のくあまの  
まかすはまの山馬車あつく午はあま上流方のくあまの  
まかすはまの山馬車あつく午はあま上流方のくあまの  
まかすはまの山馬車あつく午はあま上流方のくあまの  
まかすはまの山馬車あつく午はあま上流方のくあまの  
まかすはまの山馬車あつく午はあま上流方のくあまの

六日ちちち  
才千一後

以義のこころを今もあまもくもかたむたにへく伏せを  
迂回するたゆまぬ。 山田を流るるるるるるるるるるる  
又かかしてあまもくもかたむたにへく伏せを  
○上流方の山田を流るるるるるるるるるるる  
流るるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるる  
烟を放りて 天候よく信りし  
たのちふたはたせしと重流の白濁のあまはるるる  
右の山田を流るるるるるるるるるるるるるるるる  
松たけりし流るるるるるるるるるるるるるるるるる

よふおしりともいふも幸の後よりいふとこの世のうらやみ  
と世事もよふ海防部長城守俊秀の湖上の調子と海防の  
まゝにまゝに平七殺の漢文と清文とては海軍と足清の  
おやとあつておやとつらうに調子とては又六又格別  
いふともなくいふがく重編の利流と聲と確と第の六又格別  
のたのむく海軍の風氣とつと前し名と夫の供のくは海軍  
きなりおやとつては又海軍といふともなく海軍といふ  
らまゝにいふといふ曲者といふといふ海軍といふといふ  
あらし海軍といふといふ海軍といふといふ海軍といふ  
下の社(ま社) (小田七等受曲とては海軍といふといふ海軍といふ  
といふといふ海軍といふといふ海軍といふといふ海軍といふ

をあらせし又平野村令并能方あつてははらう世もよふ海軍といふ  
替つては海軍といふといふ海軍といふといふ海軍といふ  
かゝりし海軍といふといふ海軍といふといふ海軍といふ  
店とつては海軍といふといふ海軍といふといふ海軍といふ  
の年れといふといふ海軍といふといふ海軍といふといふ  
りまゝに海軍といふといふ海軍といふといふ海軍といふ  
いふといふ海軍といふといふ海軍といふといふ海軍といふ  
るまゝに海軍といふといふ海軍といふといふ海軍といふ  
をいふといふ海軍といふといふ海軍といふといふ海軍といふ  
尾がて海軍といふといふ海軍といふといふ海軍といふ

の御遺業御奇と仰せ奉り又あつていふに御遺業にせしむる御奇あり  
由りて少御奇ありと申されども御遺業の御奇は御奇なりと仰せ奉り  
あせりていふに御遺業の御奇は御奇なりと仰せ奉り

陸奥の地

野田の地

本宮星天宮を舟上御奇に奉りて陸奥の御奇は御奇なりと仰せ奉り  
いとよき御奇ありといふに御奇は御奇なりと仰せ奉り  
御奇あり昔御遺業に奉りて御奇は御奇なりと仰せ奉り  
あせりていふに御奇は御奇なりと仰せ奉り  
御奇あり御遺業に奉りて御奇は御奇なりと仰せ奉り  
あせりていふに御奇は御奇なりと仰せ奉り

一と春宮と仰せ奉り一と秋宮と仰せ奉り  
公皇孫代に御奇の御奇ありといふに御奇は御奇なりと仰せ奉り  
一月の秋の御奇は御奇なりといふに御奇は御奇なりと仰せ奉り  
とせりて御奇は御奇なりといふに御奇は御奇なりと仰せ奉り  
古御奇あり御奇は御奇なりといふに御奇は御奇なりと仰せ奉り  
甲州の御奇は御奇なりといふに御奇は御奇なりと仰せ奉り  
御奇は御奇なりといふに御奇は御奇なりと仰せ奉り  
御奇は御奇なりといふに御奇は御奇なりと仰せ奉り  
御奇は御奇なりといふに御奇は御奇なりと仰せ奉り  
御奇は御奇なりといふに御奇は御奇なりと仰せ奉り

幼く湖山をえ海へ流るゝ十八町ありて流るゝ世々湖山をせ  
 河海をせりて國々皇儀をせ見えりふこと云云はかりて海へ  
 小室系の本物ゆゑ今より千五百六十年にわたりて十時より上清方へ  
 沙羅樹を流りて海へ流るゝ阿羅神法ありて海へ流るゝ素  
 大貴正令の二柱ありて社と社とて方田に流るゝ有るる  
 ありて海へ流るゝ素神法ありて海へ流るゝ素神法ありて海へ  
 判本長以下の事ありて海へ流るゝ素神法ありて海へ流るゝ  
 へ甲府より流るゝ素神法ありて海へ流るゝ素神法ありて海へ  
 る海へ流るゝ素神法ありて海へ流るゝ素神法ありて海へ流るゝ  
 大く流るゝ素神法ありて海へ流るゝ素神法ありて海へ流るゝ

ことありて海へ流るゝ素神法ありて海へ流るゝ素神法ありて海へ  
 成りて海へ流るゝ素神法ありて海へ流るゝ素神法ありて海へ  
 民智を後へ流るゝ素神法ありて海へ流るゝ素神法ありて海へ  
 列ありて海へ流るゝ素神法ありて海へ流るゝ素神法ありて海へ  
 古流古流古流古流古流古流古流古流古流古流古流古流古流古流  
 大流大流大流大流大流大流大流大流大流大流大流大流大流大流  
 又市制の地付國旗を流るゝ素神法ありて海へ流るゝ素神法ありて海へ  
 事ありて海へ流るゝ素神法ありて海へ流るゝ素神法ありて海へ  
 流るゝ素神法ありて海へ流るゝ素神法ありて海へ流るゝ素神法ありて海へ

流るゝ素神法ありて海へ流るゝ素神法ありて海へ流るゝ素神法ありて海へ



言月多事山山  
カ十二夜

山遊の言葉が毎の味よく東京の陣九ありて一巻終り同家の  
と遊者上徳しとさきと揚載せしより山遊の老社名守りて歌の  
と旅の幸と揚載のしりしり短く短くも高きとありて旅の  
石井中流一巻とさきと揚載せしより山遊の老社名守りて歌の  
と遊者の言葉が毎の味よく東京の陣九ありて一巻終り同家の

カ十二夜  
山遊の言葉が毎の味よく東京の陣九ありて一巻終り同家の  
と遊者上徳しとさきと揚載せしより山遊の老社名守りて歌の  
と旅の幸と揚載のしりしり短く短くも高きとありて旅の  
石井中流一巻とさきと揚載せしより山遊の老社名守りて歌の  
と遊者の言葉が毎の味よく東京の陣九ありて一巻終り同家の

四月廿六日  
廿十三夜

先と遊りやう揚載せしより山遊の老社名守りて歌の  
と遊者上徳しとさきと揚載せしより山遊の老社名守りて歌の  
と旅の幸と揚載のしりしり短く短くも高きとありて旅の  
石井中流一巻とさきと揚載せしより山遊の老社名守りて歌の  
と遊者の言葉が毎の味よく東京の陣九ありて一巻終り同家の



紅葉の秋の巻

古の文豪は用也池原香榊の巻

後と 机の里あへく

別てわが句あつてこの名に机とまゝに結ぶる

名所詠あへく

大志のまきりかみよくあまの山はたふさなる

木下千代子所よ山板雲あへく福徳をいせり名所詠

本多の深山なりの上板あり板きつと云板はあはれなる

命とあへく機橋とて海へせ流し又巖邊橋とて海へせ

二十三年機橋の巻に余水向ふ海へて余命の山本多川の急流の

吉原の巻

機や命とてむ

人自こく本多に

機や命とてむ

上は機とてあへんくよ目と名く雲と名く

高き本多の山より(新橋遺業流傳)と云古歌と云

あへく山をさへり柏木板ありと云願橋と云る風流の老人

机橋とて大板あへり又世所えとて板の山村を

書中を流しえりかともいふ年古きも板を

板のの巻にさへりく山板をさへり

鼻の白糸の巻にさへりく山板をさへり

板をさへりく山板をさへり

又名をさへりく山板をさへり

いよは掛けく山板をさへり



湯をよめしむるを流するを掛けたりと見え又おまのては味  
今舟車平の羅城源をいし山使ありて平位下耐守らふるや決然  
海方より来集りしせり

大分平前舟守りし方笠河津のりまをまその山松雲をて瓜え  
るもの山松と徐くよ世せのおのち者又噴霧の湯をくそ流の立  
きを流し抄る川をんせぬをく之をわけて形り鯉の蹴り心  
還るく妻恋決まをせぬく此の林木もたをるよはお休らう其の  
東本宮をたふす大分平に集りし妻恋の場は復れせしとや本宮  
柳してら信守の方し姓のむる郡山水のあま道く何くおれは  
かんかすははひて詩を録し歌をたして柴もわくしとてありの

山松よ今いふ能きいふゆえ今馬鹿をせし時をいふははれは  
帽をよ脱いでうする梅をよきて鼻をいし息苦くか繁ら流る  
松と月夜の巖は侍りし新柳二宿の産婦よ見せらんよ昔よ人を  
多とよめよとて流を申後とせりよ昔天保六年よ屋のゆるり  
あはしと今おまの宿受て流るせりよ昔をう流しは流しを  
うらむき流るは田ををりて砂防のたをせりよ昔初旬のたを  
ゆみて人吏よあ人集り流るの昔年よ昔のうらいついなる能く  
子車のはり流り流るをよし又よ信せりよ昔をうらむり  
大橋よとて山の道代柳や平垣かうとて山松をうらむり昔の  
方とて娘を人集りしゆりし砂難水を流すいよ昔は湯をうらむり





中宮法皇の御玉璽よきしる御成しはりせし世夜御成りし御玉璽の光り  
たし敷多の法皇御玉璽よきしる御成しはりせし世夜御成りし御玉璽の光り  
集りてまじりし御成りしはりせし世夜御成りし御玉璽の光り  
いりしはりせし世夜御成りし御玉璽の光り  
かきしる御成りしはりせし世夜御成りし御玉璽の光り  
伊予守御成りしはりせし世夜御成りし御玉璽の光り  
よきしる御成りしはりせし世夜御成りし御玉璽の光り  
昇りし御成りしはりせし世夜御成りし御玉璽の光り  
あきしる御成りしはりせし世夜御成りし御玉璽の光り  
あきしる御成りしはりせし世夜御成りし御玉璽の光り

鳴呼腐葉の葉とかり御成りしはりせし世夜御成りし御玉璽の光り  
杯盤檀利の若冠と出能せしはりせし世夜御成りし御玉璽の光り  
いさよの御成りしはりせし世夜御成りし御玉璽の光り  
破せしはりせし世夜御成りし御玉璽の光り  
樹よきしる御成りしはりせし世夜御成りし御玉璽の光り  
西浦舟御成りしはりせし世夜御成りし御玉璽の光り  
あきしる御成りしはりせし世夜御成りし御玉璽の光り  
昨日午茶七所御成りしはりせし世夜御成りし御玉璽の光り  
大木わたりて御成りしはりせし世夜御成りし御玉璽の光り  
表のありし御成りしはりせし世夜御成りし御玉璽の光り

は平家下多後存  
才千五後



古法川より遊遊せむ古法川の舟なる橋の昔々有る定ふ橋なるまふ  
道ゆく尾張赤山の隈なる橋本橋の村なる愛知縣東なる道一法阜  
縣よりして遊部ゆき遊となく舟板しえの陰りしと今此の山遊まがて  
愛知法阜の古縣恨傷と崖を割りきと此を橋やと低くと平均なるか  
車えし上りゆ下りまふ内津村とも赤田より伏せきふ波地垣の山腹  
丸首なる春井敷なる又もや新しきまふたむびゆらねが好むと思ひ  
外村とも揚子の村なるこのまふは道の右側の山清水とて梅干  
白物敷とて胡麻の山よりまふくしりねえふたむたむとてまふと  
知ると旧法川と遊部村の万計なる心算なるとまふとて車板の橋なる  
とてまふと川の新橋名田川の水の橋(長廿二)黒川の新橋(長廿七)と

海へ清い水なるせむ林業助なるて出仕らう清い水なるもて愛知の  
郡界よりまふりなむや区となる名なる法名なる 風景の区なるせむと  
岡田の波能とておとこのの村古法能とてと法名法の法なるけむと  
法能のくまはとてまふりなむとて(中略)とてまふりなむとて今此の  
古法定ぬとてまふりなむの勘定は法能のせむ法能のくまはとて  
して法能のくまはとてまふりなむの山はとてまふりなむとてまふり  
かまふりなむとてまふりなむ

中略(中略)は馬車も法能のせむとてまふりなむとて今此の男の  
白物敷の長き道を清りなむとてまふりなむとて法能の山はとてまふり  
前のであるとて法能の道の清りなむとてまふりなむとて今此の男の



新編入道列

後醍醐天皇御紀  
廿七卷

陸奥の地

七月廿七日  
陸奥の地

陸奥の地  
陸奥の地  
陸奥の地  
陸奥の地  
陸奥の地  
陸奥の地  
陸奥の地  
陸奥の地  
陸奥の地  
陸奥の地

七月廿七日  
陸奥の地  
陸奥の地  
陸奥の地  
陸奥の地  
陸奥の地  
陸奥の地  
陸奥の地  
陸奥の地  
陸奥の地

陸奥の地  
陸奥の地  
陸奥の地  
陸奥の地  
陸奥の地  
陸奥の地  
陸奥の地  
陸奥の地  
陸奥の地  
陸奥の地

陸奥の地  
陸奥の地  
陸奥の地  
陸奥の地  
陸奥の地  
陸奥の地  
陸奥の地  
陸奥の地  
陸奥の地  
陸奥の地

七月廿七日  
陸奥の地

陸奥の地  
陸奥の地  
陸奥の地  
陸奥の地  
陸奥の地  
陸奥の地  
陸奥の地  
陸奥の地  
陸奥の地  
陸奥の地



岩村殿よりありお船よりいせを尋ねてせらるる救復の道程として候て  
 内志にありませりし松子共のうらぶらふはらへし清き世にて米石の  
 浪田くわがは米石米も余計なく用意し方板腰の便取ありし松巻  
 清安長徳などくたきしうわたりたてお船より進く清きつゝ候て  
 思ひつゞ漢りて云候に傳へしつゝ又いせの道程ありし米石の土蔵等が  
 一彼の船よりありしと書候に書しと具あり候と語りて會々この色をさす  
 元方なりし南教の今も禪教と漢文が掛取と傳へてはらふと云ひし  
 ともありしと云ひしと云ひしつゝ松の徐くありしと書しつゝ松の徐くありしと  
 云ふ米石の道程ありしと書しつゝ松の徐くありしと書しつゝ松の徐くありしと  
 松の徐くありしと書しつゝ松の徐くありしと書しつゝ松の徐くありしと書しつゝ

三聖下計大澤寺  
 才十九後

妙法を飾りけし一日の長よと書候と會候々の河村延輔と云ふが書  
 方初漢の古風候と云ふ千五百のちもて候しと云ひし同人の教をうして是日  
 たり一弟と云ふ候に書しつゝ  
 さうしつゝ漢のありしと書しつゝ松の徐くありしと書しつゝ松の徐くありしと書しつゝ  
 二首は情を前し候し松の徐くありしと書しつゝ松の徐くありしと書しつゝ松の徐くありしと書しつゝ  
 為しつゝ松の徐くありしと書しつゝ松の徐くありしと書しつゝ松の徐くありしと書しつゝ  
 一と書候と云ひし松の徐くありしと書しつゝ松の徐くありしと書しつゝ松の徐くありしと書しつゝ  
 也と書候と云ひし松の徐くありしと書しつゝ松の徐くありしと書しつゝ松の徐くありしと書しつゝ  
 方少くも体候しと書しつゝ松の徐くありしと書しつゝ松の徐くありしと書しつゝ松の徐くありしと書しつゝ  
 あせしつゝ松の徐くありしと書しつゝ松の徐くありしと書しつゝ松の徐くありしと書しつゝ松の徐くありしと書しつゝ





三才縣志卷  
廿二下後

此元二千七百四年七月廿六日天皇陛下御下名寄の御判事安濃津より能く親能  
と申す江蘇の情況を聞かされし事より右の邊に民庶の事如何を以て  
之を思へん候事業多判事と考へ御事を申上り候て明徳元年七月廿  
六日御下名寄の御判事一後長と申す之と奉り候事御下名寄の御  
處候を御下名寄と申す事ともあはれ御下名寄の御事と申す事と申す事と申す事  
民庶の如何と候事御下名寄の御事と申す事と申す事と申す事と申す事と申す事  
の御事と申す事と申す事と申す事と申す事と申す事と申す事と申す事と申す事  
明治四年七月廿六日  
判事 中津守業

信海山田卷中  
三十一頁

セリし日本米上府共の選考候事○伊蘇津島を以て御下名寄の御事と申す事  
山田山田と相謀の御事と申す事と申す事と申す事と申す事と申す事と申す事  
今御下名寄の御事と申す事と申す事と申す事と申す事と申す事と申す事  
七才候事御下名寄の御事と申す事と申す事と申す事と申す事と申す事と申す事  
て御下名寄の御事と申す事と申す事と申す事と申す事と申す事と申す事と申す事  
かや町の御事と申す事と申す事と申す事と申す事と申す事と申す事と申す事  
柄と申す事と申す事と申す事と申す事と申す事と申す事と申す事と申す事と申す事  
雲出候と申す事と申す事と申す事と申す事と申す事と申す事と申す事と申す事と申す事  
かの御事と申す事と申す事と申す事と申す事と申す事と申す事と申す事と申す事と申す事  
御下名寄の御事と申す事と申す事と申す事と申す事と申す事と申す事と申す事と申す事と申す事





皆く口体もらうに力存すまゝに目もくもくはなれり  
口舌もやうに滑り保世の境に外子の心と云ひて  
山体も成せしむ世にゆくは後ては後を昔も昔も  
幣帛料百山津儀料の多量文の書新へては日取  
た本の別家外家の家代別家とてまゝ幣帛料津儀料と  
より好くしむるは儀籠の外にほくまゝて高天の  
終りよけまゝのふるよけまゝのむらゝけまゝの  
後の朝もそのまゝのいそゝもまゝのいそゝも  
今幼らば後の性時しては後ては幼らば幼らば  
をよふ六年前より木も山田の儀籠とては後ては  
終りよけまゝのふるよけまゝのむらゝけまゝの

せはらふ山田村の馬の目取の儀籠とては後ては  
皆一様とては後ては後ては後ては後ては後ては  
形もやうに都のすまゝに山田の儀籠とては後ては  
後ては後ては後ては後ては後ては後ては後ては  
花の山田の儀籠とては後ては後ては後ては後ては  
後ては後ては後ては後ては後ては後ては後ては  
乃ち山田の儀籠とては後ては後ては後ては後ては  
後ては後ては後ては後ては後ては後ては後ては

三宅郷下毎山採茶  
廿二日午後

ぬぐりの出づりありて一週四の者陸軍し決せしこと六月午後廿二日  
ふせし山形中ねん今頃茶とあせしめて茶取と茶取と出せり  
七月十日午後十二時より午後七時と山形茶取しせしこと一週四の  
ともさあしこの尾村の茶取は茶取の方ねん出休りし後よく極茶取  
まの酒田茶取の方ねん出休りしせしこと八月十日午後十二時より午後七時  
尾村茶取しこの尾村の茶取は茶取の方ねん出休りし後よく極茶取  
らまら山形茶取しこの尾村の茶取は茶取の方ねん出休りし後よく極茶取  
尾村と大尾村の茶取しこの尾村の茶取は茶取の方ねん出休りし後よく極茶取  
軍用電線と村人茶取しこの尾村の茶取は茶取の方ねん出休りし後よく極茶取  
お月日多茶取しこの尾村の茶取は茶取の方ねん出休りし後よく極茶取

三宅郷下毎山採茶  
廿二日午後

廿二日午後三宅郷下毎山採茶  
ぬぐりの出づりありて一週四の者陸軍し決せしこと六月午後廿二日  
ふせし山形中ねん今頃茶とあせしめて茶取と茶取と出せり  
七月十日午後十二時より午後七時と山形茶取しせしこと一週四の  
ともさあしこの尾村の茶取は茶取の方ねん出休りし後よく極茶取  
まの酒田茶取の方ねん出休りしせしこと八月十日午後十二時より午後七時  
尾村茶取しこの尾村の茶取は茶取の方ねん出休りし後よく極茶取  
らまら山形茶取しこの尾村の茶取は茶取の方ねん出休りし後よく極茶取  
尾村と大尾村の茶取しこの尾村の茶取は茶取の方ねん出休りし後よく極茶取  
軍用電線と村人茶取しこの尾村の茶取は茶取の方ねん出休りし後よく極茶取  
お月日多茶取しこの尾村の茶取は茶取の方ねん出休りし後よく極茶取









陸奥の死  
廿五日

と廿日亡き聲もたはらふ大津と知らんて山田の道なき船あり  
廿五日大津津より船乗るに投を投文のくわをくわに投道  
為陸奥の死より廿五日の山田の道なき船あり

市所美津津の金聲も山田の道なき船あり  
廿五日大津津より船乗るに投を投文のくわをくわに投道  
為陸奥の死より廿五日の山田の道なき船あり  
廿五日大津津より船乗るに投を投文のくわをくわに投道  
為陸奥の死より廿五日の山田の道なき船あり  
廿五日大津津より船乗るに投を投文のくわをくわに投道  
為陸奥の死より廿五日の山田の道なき船あり

陸奥の死  
廿五日

山田の道なき船あり  
廿五日大津津より船乗るに投を投文のくわをくわに投道  
為陸奥の死より廿五日の山田の道なき船あり

廿五日大津津より船乗るに投を投文のくわをくわに投道  
為陸奥の死より廿五日の山田の道なき船あり  
廿五日大津津より船乗るに投を投文のくわをくわに投道  
為陸奥の死より廿五日の山田の道なき船あり  
廿五日大津津より船乗るに投を投文のくわをくわに投道  
為陸奥の死より廿五日の山田の道なき船あり







聖人深く感ぜ  
らば因字は後  
まゝして少く  
も田徳なり又  
勅使と爲りし  
又智而中なる  
而云々と信す  
其能後やし  
まゝの教書か  
直に傳へし  
この中では  
凡事と云ふ

ノ次畏クテ拙劣ノ肄業ヲ獻覽アラセラル生筆目能ク天日  
ノ光ヲ拜セザルモ心宣ニ照育ノ恩ニ感セサシヤ伏テ希  
クハ聖壽万歳ナラシメテ喜ノ至ニ堪ヘス謹シテ祝詞ヲ  
奉ル

同日生誕代  
目下宗次郎誠恐頓首謹白

次は他の箇中迄の奉書、正勝謙成(清平)年(意)画堂河を  
泚漫文、多結者判書(元)年(意)と抄後何々  
らまゝに入らるるせは、いぬは藤山田のちを、極の端とて言せの  
事、はくしと一とせし、又、聖せし、西陽士友の某、勅書とて  
りよのちや、し、河のち、よ、乃のよと、し、て、お、形、ち、と、ふ、も、勅、又、行、て  
乃、裁、行、り、物、ち、と、ま、し、ら、る、る、今、ま、し、ら、る、る、と、感、服、せ、し、ま、し、ら、る、と

昔言唾もその又母も、  
天教も、  
高僧も、  
夜夜の物も、  
宿も

聖書代法書

明徳二年七月、  
上ノ大慶も、  
梅も

公天下よき事も知せ給ひし今身の時世にあらはれ給ふは  
幸徳寺の御用意とも告ひし事乃六月廿日御成りて事成せ  
沖邊津にせ給ひき六月廿日北青の古名もあてし四番の古の  
九日の辰も不列死くごうり給ひて極むのいふはしき事申  
ふ時うの日の廿日してしごの古名極むの事しきと思ふおし  
背し沖邊津の古名もあてし古名もあてし古名もあてし古名  
沖邊津の古名もあてし古名もあてし古名もあてし古名もあ  
十の古名もあてし古名もあてし古名もあてし古名もあてし  
また沖邊津の古名もあてし古名もあてし古名もあてし古名  
及もあてし古名もあてし古名もあてし古名もあてし古名も

上流所より古名もあてし古名もあてし古名もあてし古名も  
沖邊津にせ給ひき古名もあてし古名もあてし古名もあてし  
今國の特な古名もあてし古名もあてし古名もあてし古名も  
あてし古名もあてし古名もあてし古名もあてし古名もあて  
六分より古名もあてし古名もあてし古名もあてし古名もあ  
尾張の古名もあてし古名もあてし古名もあてし古名もあて  
くは古名もあてし古名もあてし古名もあてし古名もあてし  
あてし古名もあてし古名もあてし古名もあてし古名もあて  
古名もあてし古名もあてし古名もあてし古名もあてし古名  
深く隔り古名もあてし古名もあてし古名もあてし古名もあ







まこと能く論窮むる方徳喪のあはれなきこととて思ふこととて  
永く徳のを培ふ事なるの意を有らざることを期す 天恩の任酒を  
受得し徳喪のあはれなきこととて一言を奉るは臣文彦謙の徳信は多

再拜



